

(故) 亀田隆義君を偲んで

先日、鈴木浩君から訃報を聞いて、驚くとともに我が耳を疑った。最近はお会いする機会が少なく、仕事の第一線を退いてからは松本市に居を構えて、悠々自適の生活を送っているとばかり思っていた。松本へ移ったときには、近くに「ちひろ美術館」もあるからそのうち足をはこんでくれ、と言われていた。そして今年の年賀状には彼らしいさわやかな風景のスケッチ画があり、相変わらずの意欲に感心していたところでした。彼との出会いは、昭和39年ごろだろうか。丁度ベトナム戦争が問題となっていたころである。私は工学部で建築を志していたものの、留年中で学科の先生の計らいもあり、佐々木研に出入りが許されて模型作りや調査の手伝いなどをしてきた。おかげで多くの先輩たちとも知り合うことができたと思っている。そんな時によく研究室に出入りする亀田と出会ったのだと思う。

そして、その後、大学の青葉山移転問題をめぐって、官憲が大学の自治を侵害したという事件があり、学内騒然となった。そんな時に、「研究室の壁を超える必要がある」、「学問、研究の自由とはどういうことか」など大学の自治について夜を徹して話し合ったこともあった。こうして、短い大学生活であったが、建築の専門知識だけではなく、取り巻く社会との関係や政治・経済にも関心を持ちながら自覚的な生き方の必要性を学ぶことができたと思っている。このことがこれまでの自分を支えてきたし、ともに学んだ同期の仲間との大切な絆となって、それぞれの仕事や研究に活かされてきたのではないだろうか。

今、東北は3.11大震災により、農業、漁業のインフラ、生産手段が壊滅的な被害を受け、多くの人々が生活の基盤を失い将来への生活再建を模索し続けている状況、まさに復興の最中にある。こんな状況の中で思い起こされるのは、研究室の仲間が共同で取り組んだ卒業設計のことである。皆で議論を重ねて取り組んだのは「東北農村の将来像」。当時の産業構造が変化し、地域の生活様式が大きく変わりつつある中で将来の東北農村の姿を描くと言うのがテーマでした。予定した卒業設計展は実現できなかつただけに、当時の思いがよみがえってきます。一日も早い復旧、復興を成し遂げ、生活の安定を願わずにはおれません。

今となっては、特別な大きなことはできないけれど、変わらぬ強い思いを寄せながら、微力ながらもできる限りの力を尽くして行こうと思っています。

また、政治の舞台では時代錯誤や歴史の逆流思考が姿を見せ始めていることはきわめて危険であり嘆かわしいことです。われわれが受けた戦後教育をしつかりと受け継ぎ、子供たちのためにも平和な日本を守り育てていくよう努めたいと思っています。

亀田隆義君、これまでわれわれの傍にいてくれて本当にありがとう。

これからも天上から励まし、見守っていてください。さようなら。

千田卓内（15回生）